

過ごし方のヒント

2020. 7. 7



短くても、宝物の時間…

1 気が向いたら

子どもがなかなか本を読まない。そんな時、何より大切なのは、大人も一緒に楽しむこと。でも、「さあ、読むぞ。」と張り切ったら、「自分で読むからあっち行って。」なんて言われることも…。

まずは、お子様が読んだり見たりしているものを、よーく観察してください。コミックでも、雑誌でも活字ならいいと思います。コミックなら、お互いに登場人物になって、台本の読み合わせのように読み合うのもいいですね。図鑑なら「すごい恐竜知ってるね。」と感心するだけで、難しいカタカナの名前も熱心に自分で読み始めます。

二人の間に本という材料を置いて、それをどう料理しよう（楽しもう）と相談する姿勢が大切です。「読んでー」と言われたら読んであげればそれでバッチリ。子どものタイミングで行うことを忘れないでくださいね。

特別な時間

暑さや雨で外に出られない日が続きますね。そんな日は、大人が子どもに本（絵本）を読んであげる、というのはどうでしょう。本校は、昨年度、図書館教育の研究会を行いました。学校図書館の効果的な活用や新聞を使った思考力を高めるシンキングサプリなどに取り組む中で、本を読み、考えることを身に付けたお子様がたくさんいます。

本を読む習慣が身につくお子様にとっても、文字を読むことが少し苦手なお子様にとっても「大人が本を読んでくれる特別な時間」は、心に響きます。一人で自分の目で文字を追うことと、相手の声を耳から心地よく聴くことは、全く違った体験になります。高学年でも、心の安定や「聴く」という経験を充実させる機会になります。

2 目で読むこと・耳で聴くこと



赤ちゃんは、一才頃に片言を話し始めますが、それまでにすごい数の言葉や音のシャワーを浴び、身近な人が話している言葉の音を聞き分けられるようになり、その意味をおぼろげながら理解するようになり、やっと自ら言葉を発するようになります。奇跡のような力です。今、小学校に通うお子様が話をしていること、そのことがすごいことなのです。決して「当たり前」ではありません。

聴くことによって、想像する力が大きく向上します。文字を読む負担を軽くすることで、ストーリーの全体像もイメージしやすくなります。登場人物の名前も覚えやすくなります。本の世界に入り込むことの助けになるのです。

文字ができるまで、人は長い長い物語を口述し覚えることで、歴史や知恵を伝えてきました。文字が使われ始めたのは、人の長い歴史に置き換えれば、つい最近です。文字を読むためには、まだまだ、脳の多くを一生懸命使っています。そこを少しでも楽にしてあげると、本の世界を、自由に飛び回れるようになれますよ。

どんなに読んであげたくても、いつの間にか読んであげることも無くなります。お子様が「読んでー」と言ってくる間は、年齢や学年で区切らず、それに答えてあげてください。

